

第2節 尾張地方を中心とした弥生時代前期の諸相

1 はじめに

遠賀川系文化が波及した東端の地とされる尾張地方における弥生時代前期の状況は、朝日遺跡貝殻山貝塚、西志賀遺跡などの学史上著名な遺跡が数多く存在するにも関わらず、長らくその実態は不明であった。それは、小規模な発掘調査および表採資料に基づく土器の型式学的な研究にのみ終始し、それ以外の材料を用いての研究がなおざりにされていた点に起因すると考えられる。近年、ようやく当地方においても山中遺跡（一宮市）、松河戸遺跡（春日井市）、月縄手遺跡（名古屋市）、高蔵遺跡（名古屋市）等面的な発掘調査がなされ、良好な資料に接することができるようになってきた。

そこで本節では、尾張地方を中心として現在までに蓄積された資料を今一度整理し、「土器」・「石器」・「集落」・「墓制」等の観点より、弥生時代前期の抱える諸問題について考えてみたい。

（服部信博）

2 土 器

〔突帯紋系土器〕

まず、山中遺跡から出土した粘土紐を口縁部あるいは口縁部と肩部に張り付けた、縄文時代晩期後半に編年される、いわゆる突帯紋土器とそれに伴う土器について簡単にまとめてみたい。

山中遺跡出土の突帯紋土器は、3次調査のものも含め12点出土している。このうち口縁部が10点、肩部が2点である。

これらのおもな特徴は、口縁部が丸みをもちやや外反している。そして少し下がった位置に幅の広い低い突帯を貼り付け、その上に二枚貝あるいは指頭によって押圧を行っている。肩部突帯は2点と数少ないが、口縁部突帯と同じく幅の広い低い突帯が貼り付けられ、その上を貝殻によって押圧が施されている。これらの突帯紋土器はいずれも小破片であるため器表面の調整については良く解らないが、3次調査出土の資料（図版6一下段）や、今回出土の資料（図版6-63）は突帯以下に横位の二枚貝痕を施す。おそらく他の資料も同様の調整が行われているものと思われる。

以上の突帯上を貝殻や指頭によって押圧する手法などの諸特徴から、山中遺跡出土の資料は、当地方で馬見塚式とされる型式に相当するものと考えられる。

突帯紋土器以外の土器は、無文粗製の深鉢や鉢などがある。厳密な意味で突帯紋土器と共伴とはいえないが、調査時の所見などから同時期のものと見てさしつかえないものと考えられる。

このうち量的に最も多いものは、突帯紋土器と同じく器表面を貝殻によって調整した無文粗製の深鉢と、器表面をヘラ状工具などでケズリ調整を行った無文粗製の深鉢である。これらも突帯紋土器と同様、破片資料が多く全形が分かる資料は少ないが、口縁端部の形状によって、口縁端部を丸く仕上げるもの（図版9-87）、面取りを行い粘土が土器の内外にはみ出したもの（図版7-70）、端部が内傾し面取りが行われているもの（図版8-73）などに分類することができる。大参義一氏によれば、このような無文粗製深鉢の口縁端部の面取りは新しい要素とされ、馬見塚遺跡D地点は古い様相を示し、下り松遺跡は新しい様相を示すとされている（大参 1972）。これによるならば山中遺跡の資料は下り松遺跡に近く、馬見塚式の中でも新しい段階から、古沢町遺跡・西浦遺跡出土段階までの様相を示しているものと考えられる。

突帯上の施文は、近畿地方などではヘラ状工具などによって斜め横方向から刻み目を入れるものが一般的であるが、本遺跡のように貝殻もしくは指頭によって押圧を行う施文方法はこの地域の特色の一つであり、馬見塚式のメルクマールともされている。また、施文具や調整具などに貝殻が使い続けられるのもこの地域の特徴といえよう。

同時期の資料は尾張地方では、同じ一宮市内の馬見塚遺跡（一宮市 1970）や下り松遺跡（一宮市 1970）、南知多町の神明社貝塚（南知多町教育委員会 1989）などで出土している。また、岐阜県徳山村のはいづめ遺跡（岐阜県教育委員会 1990）出土の突帯文土器も山中遺跡出土の資料に近似するが、山中遺跡出土資料の底部が平底であるのに対し、はいづめ遺跡では丸底のものもみられる。時期差ではなく地域差であろう。このはいづめ遺跡の資料に関しては同報告書中において「下り松式」の名称が使われているが、その型式内容について詳しくは触れられておらず、安易な型式設定は問題があると思われる。

馬見塚式については増子康眞氏による一型式論、大参義一氏・中村五郎氏による細分論、設楽博己氏による否定論などその評価は大きく分かれており、問題の多い型式である。ただ、豊川市の麻生田大橋遺跡の同時期と考えられる資料が器表面の調整などにおいて様相を異にしており、尾張と東三河とでは型式内容が若干異なることが指摘されている。

馬見塚式を含む尾張地方のこの時期は、他地域の突帯紋深鉢が時間的に一条突帯から二条突帯へと変化をしていくのに対し、最後まで一条突帯であること、他地域の深鉢がほとんど全て突帯のつく深鉢であるのに対し、当地方では山中遺跡のように突帯紋深鉢と突帯のつかない無文の粗製深鉢が数多く存在すること、また、土器組成中の浅鉢の比率も他地域に比べ少ない、という諸傾向がみられる。この様な特色から同じ突帯紋土器圏内であっても、その東端にあたる尾張地方ではかなり様相の異なった状況であったことがうかがえる。この土器型式の内容の差異は、あるいは次代の稲作の受容のあり方に関わってくるものであるかもしれない。

他地域との対比では、氷Ⅰ式併行と考えられる細密条痕の深鉢（図版12-111・図版13-112）が出土しており、これによって中部高地、あるいは関東との時間的な関係のある程度押さえることができると考えられる。西日本との関係については、直接対比できるような資料に恵まれていないが、現時点では従来増子康眞氏によって述べられているように、近畿地方の長原式に併行するものとしておきたい。

突帯紋土器に代表されるこの時期は、稲作の開始という日本文化の基盤にも関わる問題をともなっ

ており、そのために古くから重要視され、多くの研究者によって論じられてきた。そして、その文化の動態をとらえるためにはより細かなタイム・スケール、つまり編年が必要である。しかしながら突帯紋土器は突帯以外に特徴がなく、このために編年を行う上での大きな障害となっている。また、突帯紋深鉢は地域間の差異が大きいため広域編年にも不向きである。また、浅鉢による広域編年が泉拓良氏によって行われている（泉 1989）が、より細かなところまでは到達していないのが現状である。

山中遺跡の資料が全て良好な資料とはいき切れないが、今後この地域においても山中遺跡のような新資料と、これまでの資料をもとに詳細な編年を作りあげていくことが必要であり、他の資料も加え、再度検討してみたい。（野口哲也）

〔遠賀川系土器〕

（１） 若干の問題

かつて紅村弘氏は尾張地方の前期土器を横軸において五つ、縦軸では二つに区分した（紅村 1956）。横軸の五つは、「第1類」から「第3類」までが遠賀川系土器群（組成）の変異態（組成）であり、それぞれ「正統」「亜流」「削痕系」とし、あと「条痕系」（組成）を「第4類」、出現頻度の非常に低い大洞式に類似するものを「第5類」とした。そして縦軸の二つは、「貝殻山式」と「西志賀式」とし、畿内編年との対比では、それぞれ中段階と新段階においた。

紅村氏より遅れて久永春男氏は二反地貝塚の調査成果から二反地諸式を設定した（久永 1966）。ところが、それは基本的に畿内編年を下敷にしたもので、紅村氏のようにこの地方の特性を明示する内容とはなっていない。

この地方の前期土器の内容を考える場合、研究史上からみて紅村氏の5系統区分の優秀性は明かである。ただ問題は、その後の資料増加のなかでそうした区分がどれだけ全体をカバーできているのかという点にある。これまでのところは資料増加（報告）が遅々としているところもあって特に大きな問題は生じていないようである（が、私にはそのこと自体大きな問題のようにも思える）。

さて、現状の問題は5系統区分ではなく「貝殻山式」から「西志賀式」への変遷過程が検証できないことにある。この点は久永氏の場合も同様である。いずれも基準資料の提示のないままに編年表のみ提出されているからである。紅村氏は「層位変化」に対応した「型式変化」に述べられているものの、層位ごとの資料提示がなければわれわれは判断の材料を持たないのである。まさに自分で判断できない弱者である。そのためにどうしたか。

これまで前期土器に言及した多くは、無理やり作り上げた「貝殻山式」や「西志賀式」のイメージに資料をねじ込むことになったのである。無残というほかない。

基準資料の提示がないことの責任を設定者に帰するにはこの地方の目にあまる多くの障害からみて一方的過ぎるくらいも無いとは言わないけれど、われわれ後塵を拝する朋輩が不可抗力で劣等的位置に置かれるのもまた慮外と言わねばならない。

(2) 編年

愛知県における遠賀川系土器の区分は、これまでの遅々とした資料集積の中で当遺跡を含めた遺構出土資料の漸増によって、ようやく単位と比較にもとづいて行うことができる段階に至った。すなわち、名古屋市西区月縄手遺跡土坑出土資料（愛知県埋蔵文化財センター 1990）、名古屋市熱田区高蔵遺跡SD03出土資料（南山大学人類学博物館 1988）などである。これに遺跡・地点（包含層）出土資料をあわせて大きくは次のように配列することができる。ただし、以下に述べるのは現状での試案であり、今後の資料の集積によって補正していかなければならない。

I-1 期

貝殻山貝塚下層？（愛知県教育委員会 1972）

朝日遺跡貝殻山地点（貝層）では、頸部と体部に段を有する壺や体部に削り出し突帯の壺が存在する。層位的にまとまりを有したものではないが、ここでは最古段階に位置づけておく。

I-2 期

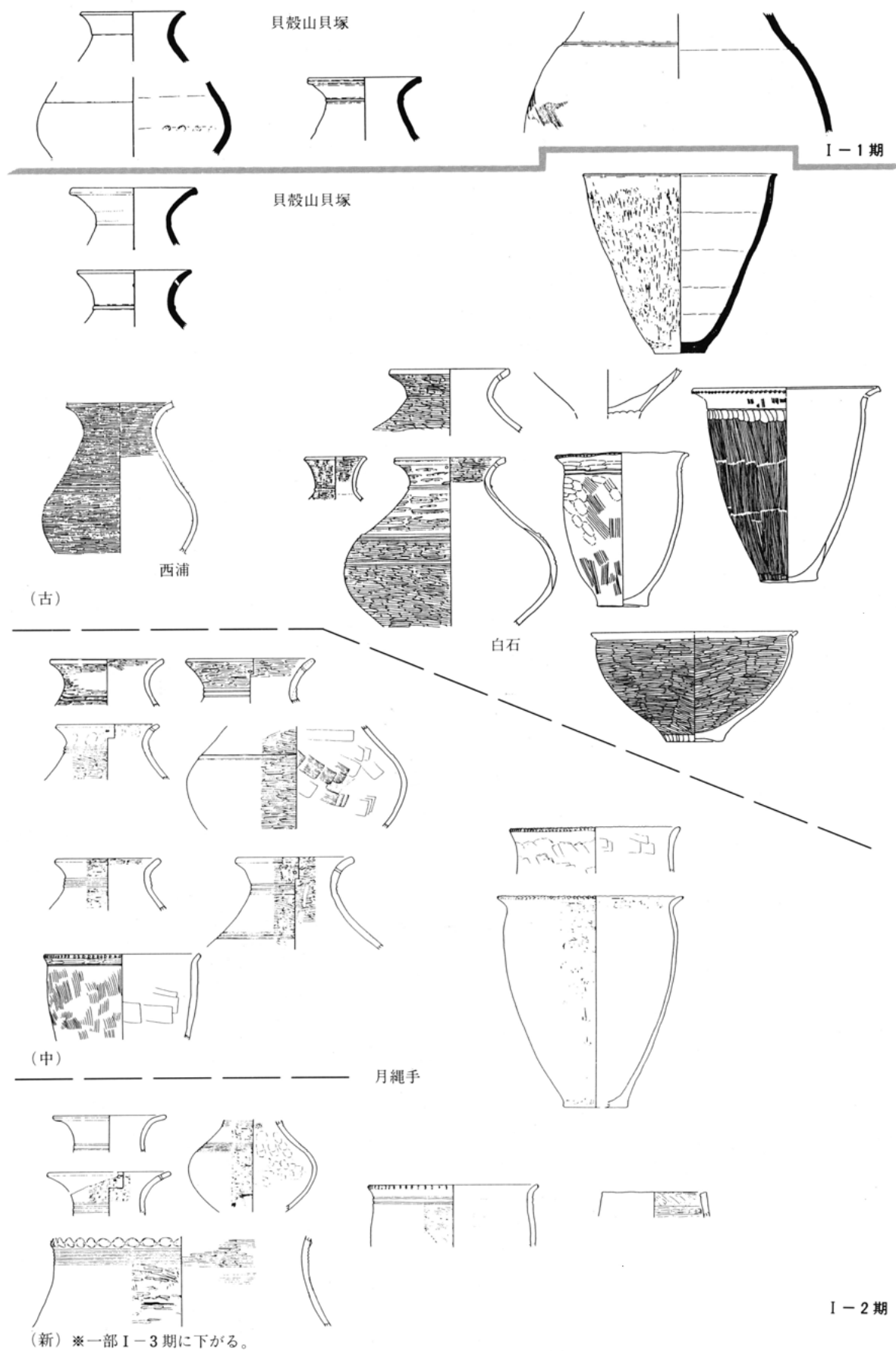
月縄手遺跡・元屋敷遺跡下層：古相（一宮市 1968）・白石遺跡（賛 1991）／／西浦遺跡（愛知考古学談話会 1985）・古沢町1号溝（名古屋市教育委員会 1971）

月縄手遺跡を基準として考えてみる。月縄手遺跡の壺には「く」字状に外反する短い口縁部を有するものと、それより口縁部が長くゆるやかに外反するものがある。形態的には前者が古い特徴を示しているので、新古の特徴が共存する資料と言える。壺では削り出し突帯、沈線ともに3条以下が主で、甕も沈線3条以下が主である。甕の沈線は壺に比べて多条化の傾向はそれほど強くなく、この時期以後も4条までを目安として普通それ以下の条数の甕が組み合わさるようである。

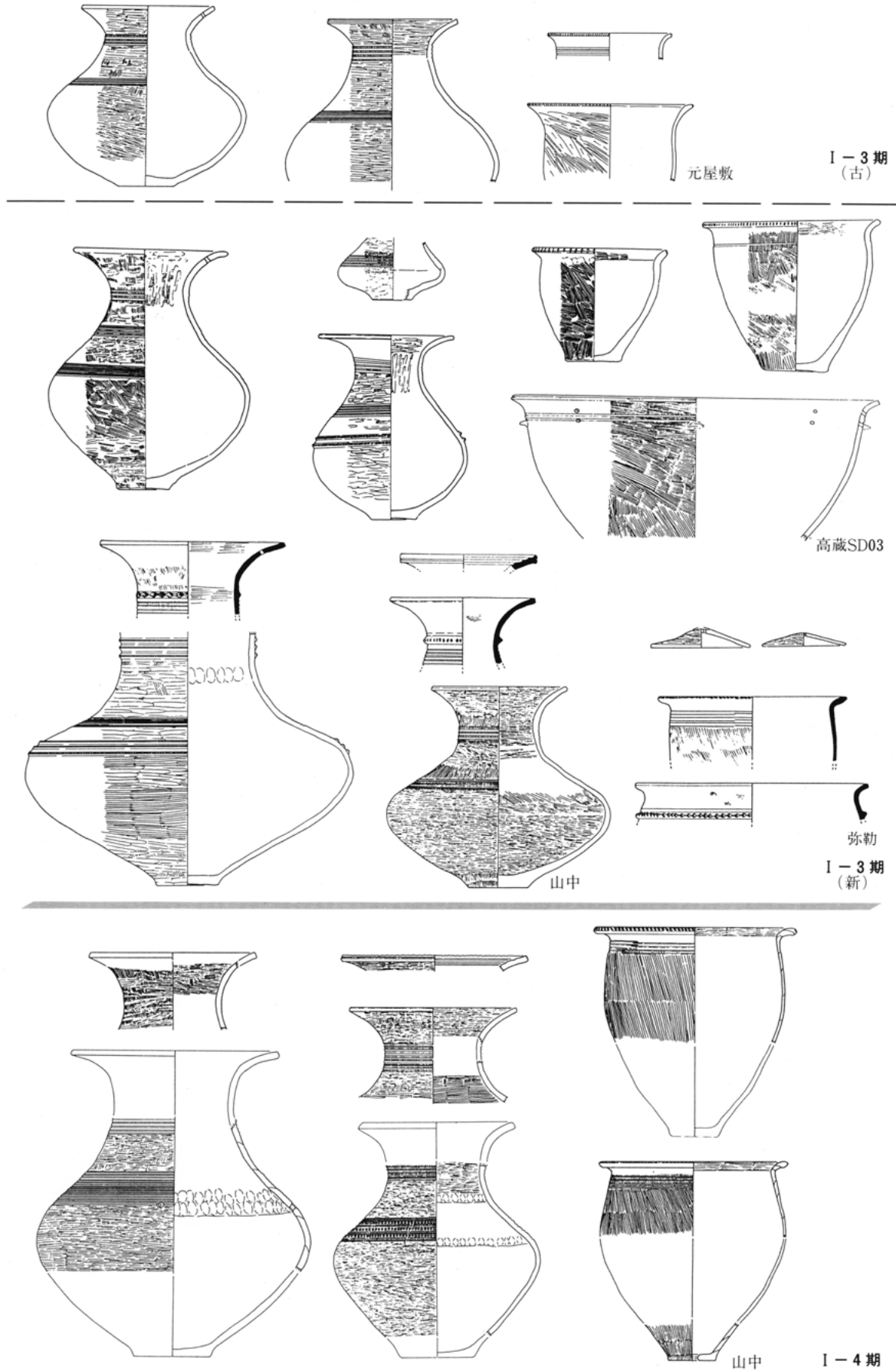
ところで月縄手遺跡資料にみる新古の様相には、それが同一時期であるのか混在であるのかなお検討すべき点がある。新しい部分には高蔵遺跡とかなり近接するか、ほとんど同じ時期と見なすことができる様相もありそうである。

問題はI-1期との間をどのように埋めるかである。現状では月縄手遺跡資料との間には型式学的差異が大きい。将来的に古相が主体をなす資料が検出される可能性は残されており、この時期がさらに区分される可能性もある。しかし、それでも白石遺跡・西浦遺跡出土の遠賀川系壺にみられる頸部沈線1条が明確な時間幅をもつことになれば、月縄手遺跡資料を最大限拡張しても同資料の出土していない現状では月縄手遺跡の範囲をそこまで広げることは難しいのである。したがって、その場合にはこれらの資料をI-1期に繰り上げるか、あるいはそれに後続する時間的位置として別に一時期設定することになるかである。

白石遺跡は三河地方で初めて検出された環濠を巡らすと推定される弥生時代前期の遺跡である。資料は十分とは言えないが、「く」字に外反する短い口縁部をもち頸部に沈線を1条施した壺があり、月縄手遺跡より明らかに古い特徴を有する。したがって、ここでは月縄手遺跡を新古に2区分して、そ



第46図 遠賀川系土器の変遷(1)



第47図 遠賀川系土器の変遷(2)

の前に白石遺跡を置くことにしたい（しかし、第46図の〔中〕にした資料はなお時間幅があり、将来の十分な検討を必要とする。）

古

中

新

西浦遺跡遠賀川系壺・白石遺跡 →→ 月縄手遺跡：古相 →→ 月縄手遺跡：新相の一部

以上のように細分の余地は残されているが、Ⅰ-2期として大きく一時期にまとめておく。

この時期体部外面ケズリ深鉢は口縁部を外反させるとともに刻みを加えて遠賀川系甕との接近を示す（いわゆる削痕甕の成立）。条痕紋系土器においても深鉢の口縁部は外反し、同様に接近する。

Ⅰ-3期

高蔵遺跡D2（名古屋市教育委員会 1982）・高蔵遺跡SD03・元屋敷遺跡下層：新相・弥勒遺跡（一宮市 1968）・松河戸遺跡（神谷・後藤 1990）

高蔵遺跡は環濠と推定される溝から出土したもので、位置的にみてD2が内側の円弧に相当するので、SD03はそれより新しい可能性を考えていた。紹介された資料による限りは確かにD2から短く外反する口縁部をもち頸部に沈線？が1条施された壺があるけれども、資料的には不十分である。遠賀川系土器については十分に比較することができないのでおくとして、条痕紋系土器にはSD03のほうが古い特徴を示す資料もあるので、溝の埋没過程を含めて遺構の検討を必要としている。松河戸遺跡をふくめて正式報告を待ちたい。

この時期の特徴としては、壺は「く」字状に外反する短い口縁部を有するものはなくなり、口縁部がややのびてゆるく外反するものや、頸部が筒状をなし強く外反するものに主体が移る。これは頸部紋様である削り出し突帯や沈線の多条化に対応した動きと考える。他には、とくに体部下半が横に強く張り出す形態の壺（「西志賀式」の指標ともされた）が特徴的に存在する。紋様は削り出し突帯・沈線ともに4条以上が主となり、貼り付け突帯も盛行する。しかし、甕においては沈線の多条化する傾向は弱く、4条以下がほとんどである。

遠賀川系遺跡での条痕紋系土器の出現率はこの時期高率となる。壺・甕とも口縁部ナデ調整で無紋のものと押し引きのものとがある。いわゆる「亜流」もこの時期から目だつようになる。

Ⅰ-4期

山中遺跡SD01上層（本文参照）

壺は沈線紋や貼り付け突帯が多条化する。この段階では削り出し突帯はほとんど見られない。

（3） 終末

遠賀川系土器に統いては「朝日式」が設定されている。これまでのところ「朝日式」に多条沈線紋の施された壺の共伴例はあるが、それを遠賀川系土器の名残であるかすることができかどうかは明確でない。共伴しても個体数が著しく少ないこと、この壺以外に遠賀川系土器につながる器種は認められないことから、こうした単体をあえて遠賀川系土器の残存と言わなければならない根拠はない。

壺における紋様のレパートリーの一つとして、「朝日式」を構成する要素と考えるほうがよいだろう。

(石黒立人)

(4) 「亜流」について

紅村弘氏によって設定されたいわゆる「亜流遠賀川式土器」(以下、「亜流」と呼ぶ)について考えてみたい。

①「亜流」の分布

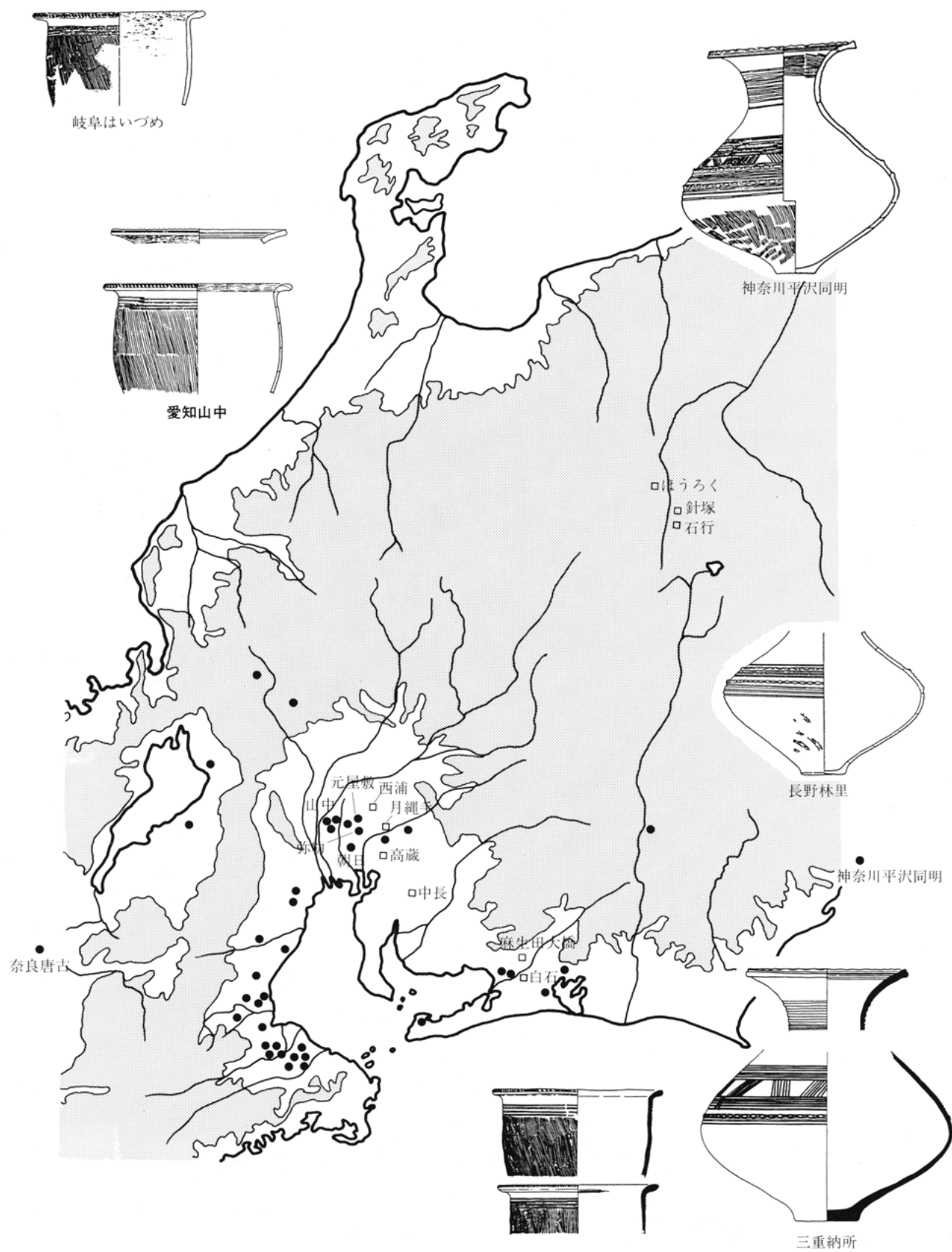
「亜流」の分布状況を第48図に示した。紅村氏が指摘されているように、その分布の中心は三重県津市の南方(中勢・南勢地方)にあることは明らかである。しかし、そのみで構成される遺跡はみられない。愛知県尾張地方の山中遺跡をはじめとした北西部にも、その分布の集中がみられるが、伊勢地方の状況と同様にやはり「亜流」単独の遺跡はない。他に、滋賀県湖北地方、岐阜県美濃地方にも出土遺跡が認められる。また、東海道沿いに遺跡が点在して分布しており、遠く長野県林里遺跡、神奈川県平沢同明遺跡等にもその出土がみられることは注目するに値しよう。中南勢地方および尾張地方における分布状況は、概ね突帯紋土器出土遺跡の分布状況に合致する(奥 1991)。

②成立の状況

伊勢湾沿岸地方の弥生前期土器研究に先鞭をつけられた紅村弘氏は、古くからこの「亜流遠賀川式土器」が、在地の晩期縄文土器(馬見塚式)に系譜がたどれ、型式学的にも追うことができると説明されてきた(いわゆる「正統遠賀川式土器」との2系統並存説)。この見解に対しては、三重県の研究者を中心に反論がだされ、「立地差説」(谷本・山沢 1971)、「1系統時期差説」(小玉・伊藤洋他 1973、伊藤久嗣 1980)などの見解が示されてきた。近年、この「亜流遠賀川式」に関する研究が進み、高橋信明氏(高橋 1985)は、甕の製作技法の面より、鈴木克彦氏(鈴木 1991)は、遺跡の立地、分布、出土状況などから、「亜流遠賀川式土器」にみられる縄文的要素を認めておられ、筆者も系譜上は在地の晩期縄文土器にたどれるものと考え。しかし、紅村氏が説くような「亜流」の型式変遷(紅村 1981)は、現状の資料では認めることはできない。

石黒立人氏は、土器の型式変化を「変容」と「変換」という大きく2つのパターンをもって説明する。「変容」とは、型式学的連続性が認められる場合、「変換」とは、型式学的連続性が追えない場合をさす。また、「変換」類型を異化作用と同化作用の2つの側面から考える。異化作用が発生するのは、影響を与える側と受けた側とが基本的に均衡関係を保持している場合認められ、同化作用は、その均衡関係が崩れ、従属的包括関係への移行によって生じるとされる(石黒 1990)。

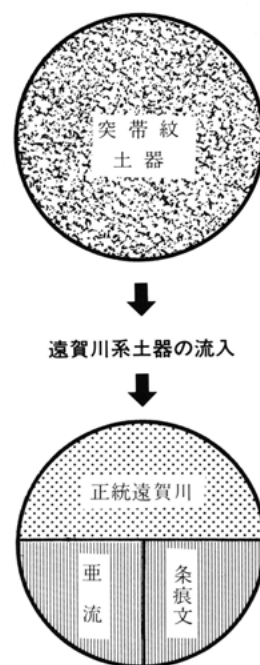
この石黒氏の考えに基づいて、「亜流」の成立を考えた時、次のような状況が推測される。縄文晩期終末期、地域性は認められるものの伊勢湾沿岸地域は、いわゆる「突帯紋土器文化」圏に含まれてい



第48図 「垂流」土器の分布

た。やがて、西方から新たな文化を持った「遠賀川系土器文化」が流入してくる。それがきっかけとなり、土器の「変換」が余儀なくされる。その「変換」は、文化的な側面よりみれば、明らかに同化作用を伴うものであったと考えられる。つまり、伊勢湾沿岸地域には上位階層としての「正統遠賀川系土器集団」と下位階層の「突帯紋土器集団」が成立することになり、土器のうえでも、それが反映され、晩期縄文土器と系譜のつながるいわゆる「亜流」が成立したものと考えられる。さらに、分布の項目で述べたように「亜流」単独で構成される遺跡が確認されないこと、短発的に遠方まで伝播している事実は、この「変換」レベルを如実に示していると思われる。また、同時期伊勢湾東岸地方に広がる「条痕紋系土器」の成立も「変換」類型の異化作用で説明がつくものと考えられる。

つまり、遠賀川系土器流入に伴う「変換」が、「亜流」と「条痕紋系土器」を生み出したといえよう。



第49図 「亜流」成立のシステム

③「亜流」の変遷

「亜流」を構成する器形は、壺、甕が中心であり、納所遺跡では鉢、無頸壺など他遺跡にはないものがみられる。しかし、現在までのところ遠賀川系土器を出土する遺跡を調査すれば必ず出土する蓋形土器は、1点もみられない。未だ蓋を掘り当てていないだけであるのか、蓋を欠く土器組成であったのか今後の検討課題である。

また、甕に関しては、近年、資料の集積がすすみ、ある程度その変遷をたどることができる。

I-2期

甕の口縁部の外反は弱く、内面のミガキ調整もみられない。

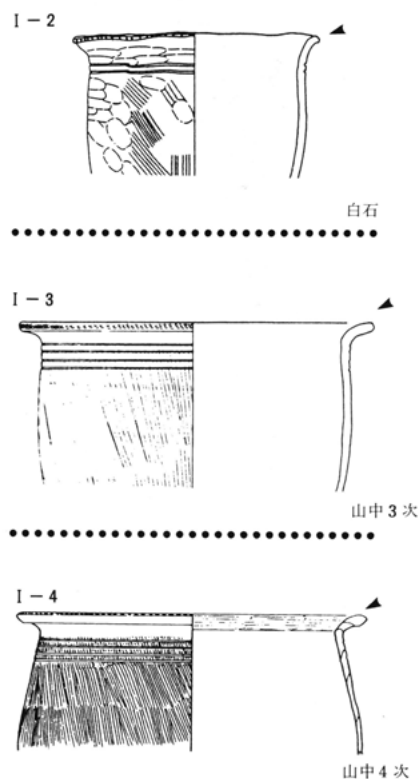
I-3期

甕の口縁部は大きく屈曲するが、口縁部の肥厚はそれほど進行しておらず、口縁内面におけるミガキ調整も顕著ではない。

I-4期

I-3期と同様に、口縁部は大きく屈曲するが、前段階と大きく異なるのは、口縁部の肥厚が顕著となり、大半の資料が口縁内面にミガキ調整を施すようになる。

しかし、この変遷はあくまでも試案であり、壺の変遷とともに今後の検証が必要となろう⁽¹⁾。



第50図 「亜流」甕の編遷

(服部信博)

〔条痕紋系土器〕

①遠賀川系土器との対応関係

I-2 期(中?)には深鉢の口縁部外反によって「甕形土器」への移行が行われる。しかし体部条痕の羽状化開始はなお明確でない。壺・甕同時でない可能性もあり、また羽状条痕に関しては思いのほか斉一的ではないようである。口唇部への二枚貝による押し引きはI-3 期には認められるものの、ナデも並存する。I-4 期には壺・甕ともほとんどが口縁部に押し引きを施すようになる。頸部の波状紋はI-3 期には確実存在するけれども、I-2 期まで遡るかどうかは不明である。また口縁部内面の紋様はI 期を通して無紋が主であり、口縁部内面施紋はII 期以降である。三河地方でもおそらくはII 期の初頭に位置し、「水神平式」の細分に関わることになるだろう。

②「内傾口縁土器」について

中村友博氏が「内傾口縁土器」(中村 1987)と呼んだ器種はI-2 期(前)には出現しており、I-2 期(中)まで遡る可能性もある。分布はもっぱら尾張・美濃地方で、三河地方東部(豊川流域)ではみとめられない。大きく観て木曽川流域に分布すると言える。多くは破片であるため全形は窺えないが、基本形は口縁部が外反せず内傾して筒状に立ち上がる無頸壺形土器である。体部上半は条痕の施されるものとそうでないものがある。条痕を施したものは近畿地方東縁部への搬出が知られる。これはII 期には「岩滑式」の「厚口鉢」へと変化する。したがって、「岩滑式」の起源は尾張・美濃地方のいずれかに求められる。

③「櫛王式」から「水神平式」への移行に関して

いわゆる「櫛王式」から「水神平式」への移行に関してはまだ整理し切れていない部分がある。かつて「櫛王式」の認識が混乱したことの一つに「櫛王式」壺の特徴である口唇部ナデ調整への過大な注目があった。この特徴はしかし、朝日遺跡や長野県ほうろく屋敷遺跡B群土器棺(明科町教育委員会 1991)のように、頸部下半に波状紋を施す「水神平式」壺にも認められるもので、なんら時間的な限定を有するものでないことが明かとなった。全形のわかる資料の重要性が痛感させられる。この点に関わって「水神平式」の細分についても問題がある。

関係する資料の時間的区分 「水神平式」の細分は頸部の波状紋を指標とする傾向が認められるけれども、少なくとも口縁部から頸部、頸部から体部、あるいは全形に近似する資料を見る限りでは波状紋を扱うだけでは不十分である。若干の資料を挙げれば次のようになる。

尾張地方では朝日遺跡(愛知県教育委員会 1982)において口唇部ナデ調整+頸部波状紋の壺が出土している。高蔵遺跡には口縁部は不明だが、頸部に波状紋、体部は羽状条痕とはならず横位条痕

の例がある。同様の例は山中遺跡S K31からも出土している。

三河地方では口唇部押し引き・体部羽状条痕であるが頸部無紋の資料が麻生田大橋遺跡（愛知県埋蔵文化財センター 1991）から出土している。豊川市教育委員会調査資料では頸部波状紋で体部斜位条痕の例がある。水神平遺跡資料（中村 1987）は口唇部押し引き＋頸部波状紋であり、体部は下半部が羽状条痕である。

長野県はうろく屋敷遺跡では口唇部ナデ調整・頸部波状紋・体部羽状条痕の壺が出土している。刈谷原遺跡（愛知考古学談話会 1985）には波状紋・体部羽状条痕の壺が1点ある。以上挙げた資料の波状紋は複帯であり、概して振幅より波長が小さく波頂部が尖るような傾向を示す。

このあとに続くのは水神平式の最終段階となり、遠賀川系土器から「朝日式」という編年区分に従えばⅡ期となる。整った波状紋やコンパス描きの波状紋が単帯あるいは複帯で直線紋化した横位条痕と組み合わさる例で、朝日遺跡、岐阜県北浦遺跡（可児市教育委員会 1973）や静岡県青木遺跡（佐藤 1982）など尾張・美濃地方から遠江地方（関東地方南部）まで比較的広範囲に認められるが、一遺跡における出土点数は思いのほか少なく、尾張地方から遠江地方西部にかけてはハネアゲ紋と共に出土する傾向にある。この場合には波状紋とハネアゲ紋という型式差が時間差を含んではいても出土状況では時間差を示していない。一時期を画したとしても極めて短期である。体部調整は基本的に羽状条痕である。繰り返すが、「水神平式」にあると言われる壺口縁部内面紋はおそらくこの段階に始まり、「水神平式」の細分では最終段階、遠賀川系土器を基準とする弥生時代前期か中期かという区分論に合わせれば中期に位置づけられる。

変化の内容と意味 さて、現状で壺の属性の組み合わせを時間差として示せば以下のようになる。

尾張地方

三河地方東部以東

a1 口唇部ナデ調整・波状紋

波状紋・体部横位条痕

↓↓↓

a2 口唇部押し引き（体部羽状条痕・波状紋）

↓↓↓

a3 口唇部押し引き・体部羽状条痕・ハネアゲ紋

口縁部内面紋

b1 口唇部押し引き・体部羽状条痕

b1' 口唇部押し引き・体部斜位条痕・波状紋

b1'' 口唇部押し引き・体部羽状条痕・波状紋

↓↓↓

b3 口唇部押し引き・体部羽状条痕・波状紋

口縁部内面紋

尾張地方におけるa1→a2という流れに逆転の可能性はなく、Ⅱ期のa3へも滑らかな組列をなして移行する。ここに長野県はうろく屋敷遺跡資料を組み込めばa1とa2の連続はさらにスムーズとなる。

遡っても属性を一つ消去すれば「櫛王式」壺と同じになる。

三河地方東部における $b1 \cdot b1' \cdot b1''$ は属性を消し $b0$ とすればこれも「櫛王式」と同じになるが、そのためには一度に二つの属性を消去しなければならない。連続した組列としては変化が大きいだけでなく、このような三種の存在は滑らかな組列を乱すものである。さて、二つの属性を消去して遡った資料が豊川市S Z 117壺（前田 1991）である。壺としての特徴は一見「櫛王式」的だが、その壺には肩部に突帯は無く、しかもすでに甕（条痕はやや羽状気味か）が伴っている。時期はどう遡らせても「水神平式」期であり、「櫛王式」との間には時間差がある。同様の例は他にもあり、偶発的現象ではない。これを組列と見るならば、深鉢（内傾～直立口縁部）から甕（外反口縁部）への変化に併せて壺も2条突帯から1条突帯に変化しているということになる。さて、この深鉢から甕へという変化をわれわれは内的変化（自由変異）とみればよいのか外的変化（条件変異）とみればよいのかどちらであろうか。さらに、2条から1条へという突帯の減少はどうであろうか。そうした変化はいったい何に起因するのであろうか。

尾張地方において甕は「櫛王式」に存在しない。甕があるのは「水神平式」である。それでは現在「水神平式」の特徴は完全に掌握できているであろうか。実際のところはできていない。破片資料が多く調査遺跡数もそれほど多くはないという事情がある。

かつて紅村弘氏は、壺に関して波状紋出現前を「水神平Ⅰ式」、波状紋を持つものを「水神平Ⅱ式」、ハネアゲ紋をもつものを「水神平Ⅲ式」として概略の変遷案を提示した（紅村 1967）。ところがこれによって説明できるのは三河東部に限定され、これに従えば尾張地方は「水神平Ⅰ式」相当が「櫛王式」と大差ないものになってしまう。こうした区分が口唇部押し引きと体部羽状条痕をすでにあるものとしている以上、その点自体が問われている現状では不十分なのである。尾張地方では口唇部ナデ調整が「櫛王式」壺に後続する属性としてあり、体部羽状条痕はさらに新しい特徴なので、「水神平式」の属性として波状紋が初発となるからである。そうであれば、尾張地方と三河地方東部では「水神平式」初期の様相が異なるという予想もできる。しかし、では初期から異なる両者をなぜ外見の類似によって「水神平式」として一括しなければならないのかという疑問が生じることになる。少なくとも尾張地方に妥当しない事項を、三河地方において波状紋を持たないB1を何故に敢えて初発に置かなければならないのか、その理由はどこに求められるのであろうか。

問えば問うほど深みにはまっていくようだが、まず、

i. 尾張地方の「水神平式」壺は「櫛王式」壺に波状紋を加えたものであり、その時深鉢は甕に変化している、

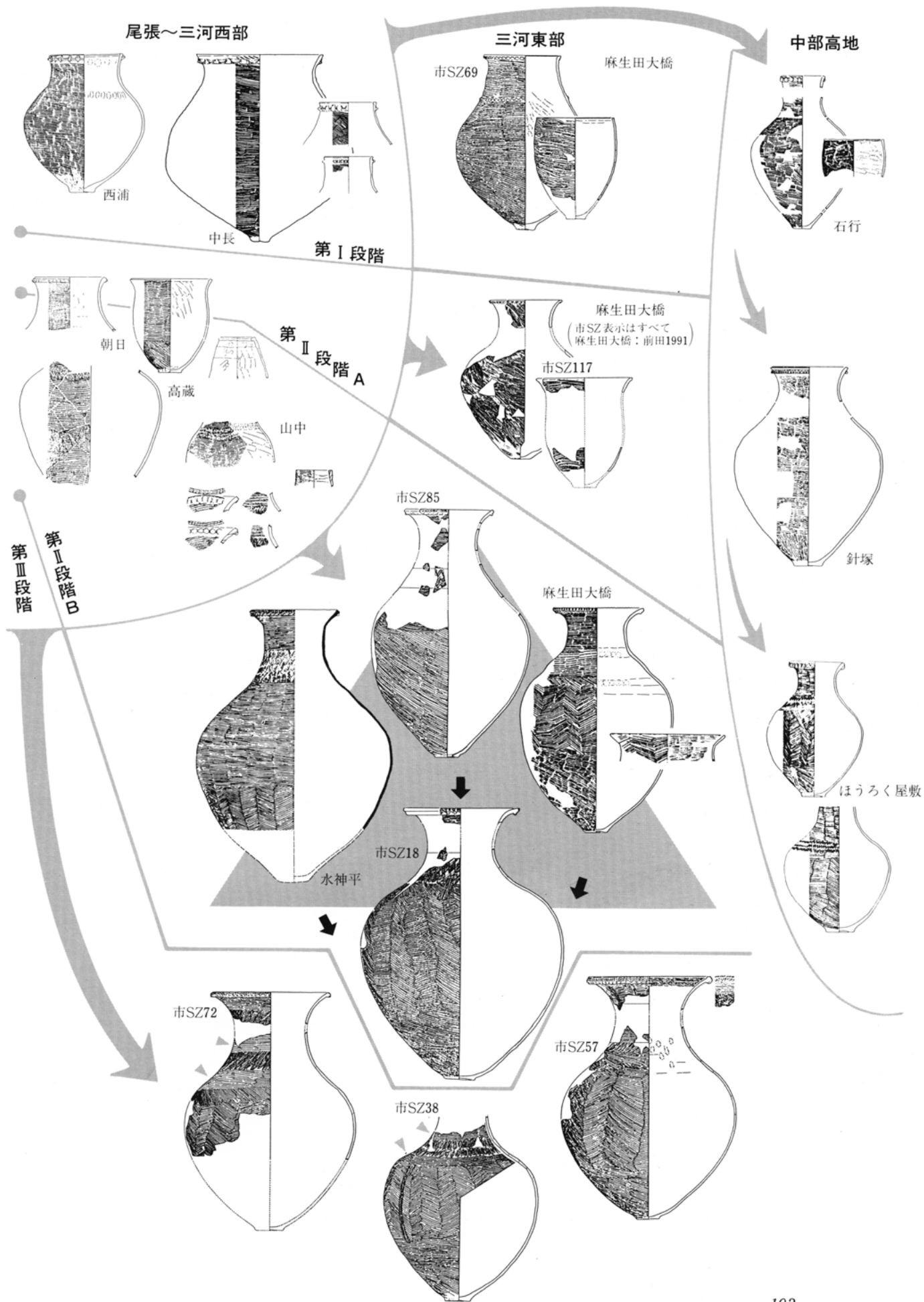
ことを認めよう。そして、

ii. 外面ケズリ深鉢の口縁部外反化にみるように、遠賀川系土器との並存期間の中で口縁部形態が変化する事実がある、

ことを傍証としよう。そうすると、

iii. 深鉢から甕形への変化は波状紋の出現と同調しなくてもよい、

ことになるので、波状紋出現時及び以後に甕形が存在するのはすでに明らかであるとして波状紋出現以前に甕形化の始まっている可能性を引き出すことができる。その点で「市S Z 117」土器はまさに



変化点の資料といえる。このようにこの一点に関しては尾張・三河両地方で同じ様に変化していると考えられる。しかし、それを「櫛王式」と呼ぶか、あるいは「水神平式」と呼ぶかどうかは、また別の問題である。

ところで、三河地方東部における「櫛王式」が2条突帯をもつことは従来から指摘されてきた。そして、それが「櫛王式」の地域差であるとも言われた。しかし、そこに伊勢地方の2条突帯深鉢の影響があるとするのなら、そのことだけでも同じ「櫛王式」としてくくることの根拠は希薄となる。前段階の突帯紋土器の特徴が復活したとしても同様である。少なくとも三河地方西部までは口縁部1条突帯のみがほとんどであって、そのような相違に系譜差を導入するならば逆に同じであることの説明はできないものとなる。かえって無理が生じる。市S Z 117 以下の資料に見るように一条突帯化の中に変化の中心があることにこそ「櫛王式」の性格、「水神平式」の成立事情に深く関わる重要な点が潜んでいると考える。

この点で壺形土器のスムーズな組列が迎れ最末にはハネアゲ紋に移行する尾張地方と、その影響下にある美濃地方・三河地方西部（矢作川流域）、そしてその圏外にある三河地方東部（豊川流域）以東という差異の発生が、斉一性をもとに組み立てられた条痕紋系土器の枠組みを前提として単にその内部の地域差に過ぎないという重箱内部的な現象ではなく、特定土器文化の成立と展開における時間的なそして空間的な中心地の存在を示唆するように思える。麻生田大橋遺跡の三点と水神平遺跡の一点、これら3つの姿を見せる「水神平式」壺の存在は、それが組列という線条的な関係になく一種三角形的な位置関係にあることは、軸をずらし揺さぶるという外的な影響による放散現象であることを強く示していると考えられる。確かに、「水神平式」期には内傾口縁土器の有無、条痕原体の差異（尾張・美濃地方〔および三河地方西部〕はもっぱら二枚貝が多用され、三河地方では様相の不明な矢作川流域を別にして東部以東では二又工具〔管状のものを半切したもの、二又の枝、あるいは棒を2本指に挟んで平行した条痕を施すようにしたもの〕・櫛〔植物茎束含む〕を原体とし、二枚貝はほとんど認められないという相違がある）など固定した地域差も認められるものの、中村友博氏の指摘する「刷毛目」の問題などを読み込むならば、「櫛王式」の成立と「水神平式」への移行という状況には、突帯紋土器終末時以降における尾張地方を中心とした非斉一的様相（同心円的差異）の固定化への動きと（決して完成はしないが）それを排除するような動きという、相反する二つの動きを窺うことができる。すなわち＜分化＞と＜統合＞の波（周期）をそこにみることができる。（石黒立人）

〔その他の系統の土器〕

弥生時代前期にみられるその他の系統の土器としては、第1節で分類したように、削痕系、浮線紋系、沈線紋系、北陸系土器がみられ、それぞれが重要な問題を提起する。本来なら、そのすべてをあげ、考察の対象としなくてはならないが、ここでは沈線紋系土器、とりわけ山中遺跡出土の図版23-300をとりあげ、器形および各部位に施される文様構成を中心に若干の問題を考えてみたい。

まず、この土器が持つ特色を記してみたい。器形的には、口縁部は緩やかに外反し、肩部が大きく張った器形であり、体部はやや内湾気味に底部に至る独特な形状を呈する。文様が施されるのは、口

縁端部・口縁下部・口縁内面・肩部から体部上半部の4ヶ所であり、文様部a～dとする。

口縁端部（文様部a）…棒状の突起と2個一對の山形の突起を4ヶ所配し、口縁を5分割する。

口縁下部（文様部b）…横位の沈線と縦位の沈線でワクを形成し、ワク内に棒状の工具を利用した刺突を加える。

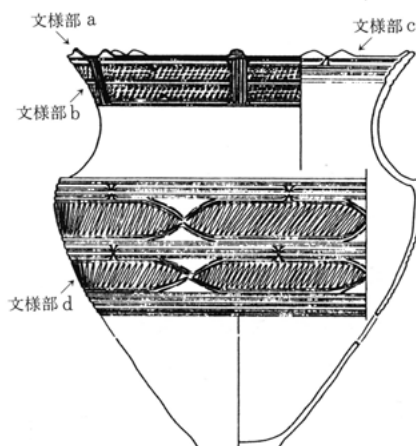
口縁内面（文様部c）…横位の沈線からなり、突起部は三角状のえぐり入れる。

肩部～体部上半部（文様部d）…横位の沈線紋帯とめがね状の区画に斜位の沈線を施す文様帯を交互に配する。横位の沈線紋帯の上・中段にはえぐりを入れる。めがね状区画は4分割。

器形的には、かつて伊勢湾岸地方の縄文晩期から弥生時代にかけての条痕紋土器研究をすすめられた石川日出志氏（石川 1981）が、EⅠ・Ⅱ類から明確にその型式変化を追うことのできるとされたEⅢ類に相当するものである。この種の土器が分布する地域は、概ね北陸地方西部、美濃・飛驒地方、尾張地方、信濃地方であり、時期的には樫王式から岩滑式併行期の遺跡で確認されと言う（石川県埋蔵文化財センター 1988）。山中遺跡出土例は、単体の出土であり、時期的に判然としない部分もあるが、同様の器形をした図版30-334が前期末に比定される遠賀川系土器と共伴している点より、本資料も、ほぼ前期末に位置付けることができよう。時期的にこの種のタイプが出土する段階と矛盾はしない。また、文様構成の面から言えば、尾張地方においては、一宮市に所在する馬見塚遺跡F地点から、五貫森式段階に比定される吸盤状突起とメガネ状の区画内に縄文充填した文様構成を持つ浅鉢が出土している（一宮市 1970）。しかし、前期末段階と考えられる本資料との時期差は余りにも大きく、直接関連付けるには多少無理があろう。そこで周辺地域に類似する資料がみられるかどうか確認してみたい。文様部aにみられる山形突起は、北陸地方から信濃地方にかけてその広がり認められ、長野県塩尻市五輪堂遺跡から同様の口縁形状をした資料が出土している（中沢 1991）。吸盤状突起と山形突起の組み合わせとなると類例は少なく、岐阜県飛驒川上流域に位置する阿弥陀堂遺跡で工字紋を施した鉢の口縁部にその類例をみることができ（大江 1965）。文様部b・文様部dは、同様の文様構成を持つ資料は認められないが、基本的にワク内を文様で飾る区画内充填紋であり、信濃地方から北陸地方にかけて広く分布する文様である。文様部cは、沈線により工字紋状に表現されたものであり、類例はやはり、北陸地方・信濃地方にみられる。

以上のように、文様の特徴からその類似する文様を周辺地域を求めてきたが、それより見られるのは、北陸地方・信濃地方との強い類似性が認められることである。今回の山中遺跡の発掘調査の結果をみれば、弥生時代前期を通してこの両地方との関連を窺える資料がみられ、本資料に色濃く反映されるこの両地方の影響を受ける基盤は整っていたと考えられる。よって、現段階においては、北陸・信濃両地方の影響を受けながら本資料が成立したと考えておきたい。

（服部信博）



第52図 文様部の位置

3 石 器

①石器組成類型について

弥生時代前期の石器は、遠賀川系遺跡に関しては伊勢湾東岸部において良好な資料に欠ける。それに対し突帯紋土器期、弥生時代前期の条痕紋系遺跡ではある程度の蓄積がある。

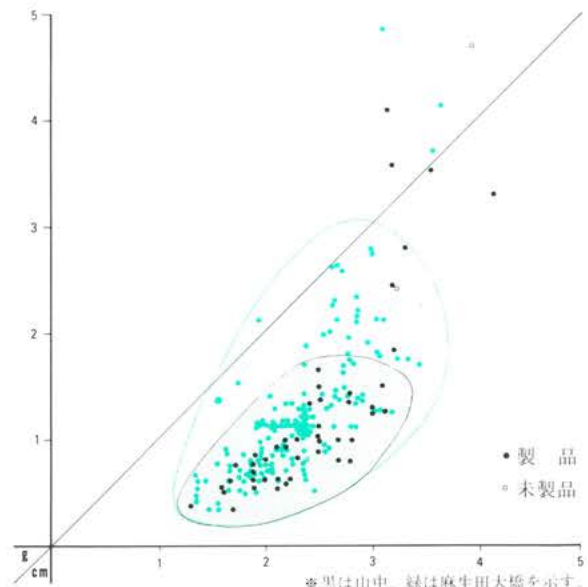
石川日出志氏は縄文時代晩期後半から弥生時代前期の資料を整理して、突帯紋系から条痕紋系への組成上の連続性を指摘した。そしてこうした石器群が弥生時代中期になっても河川上流域の台地部では中心的であるのに対し、朝日遺跡・西志賀遺跡など平野低地部に位置する遺跡では弥生時代初期には打製石斧など一部突帯紋系の石器が残ること、磨製穂摘具の僅少さを除けば基本的には西日本と共通する石器組成に移行する傾向にあるとして、前者を打製石斧・石鏃の組合せに特徴がある「台地型の石器組成」、後者を「低地型の石器組成」と呼んだ（石川 1988）。

ところで、石川氏が「第3の地域」として「台地型の石器組成」に含めた元屋敷遺跡・山中遺跡など一宮市周辺の遺跡については、今回の資料によって多少の訂正を必要とすることになった。打製石斧は突帯紋土器期に属す可能性があり、また石鏃に関しても関係する範囲を生業にのみ限定してよいかどうか検討の余地があること、そして山中遺跡における加工斧、特にえぐり入り柱状片刃石斧の製品と未成品の出土の評価についてである。

石鏃は法量分布に見るように2g・3cmを境に大小の2群に分かれる。このうち小さい方は豊川流域の突帯紋系土器遺跡である麻生田大橋遺跡の石鏃法量分布とほぼ一致し「突帯紋系」群とよべる様相を示している。それに対し大きい方には無茎鏃もあることから新しい時期の混入とは考えがたく、弥生時代中期に典型化する大形化に先行する兆候を窺うことができる。これを「弥生」群とよべる可能性は高いが、この点については他の遺跡の追認をまつことにしたい。

次に山中遺跡の石斧未成品の出土について。山中遺跡の未成品は2種類の石材が認められた。一つは頁岩、もう一つはヒン岩である。頁岩は、突帯紋土器期には石斧素材ではなく、石包丁も頁岩なので外来系石器と頁岩の関係は強いといえる。もう一つのヒン岩は、頁岩と同様に在地での入手は木曽川流域では容易である。同じものは突帯紋土器期の石斧素材（たとえば、馬見塚遺跡の磨製石斧）としても用いられていたので②で触れる下呂石も含めて在地の伝統的な石材流通に依存しつつ独自に製品化（自家製作）をおこなっていたと考えることができる。

山中遺跡は環濠集落である。したがって、近畿地方以西との共通性を内包していることは十分予想される。これまでのところ決して明確で



第53図 山中・麻生田大橋遺跡石鏃相関図

はないけれども、おそらく伊勢湾地方において山中遺跡と同様の〈環濠集落〉という形態をとる集落では、在地（突帯紋土器期）的な石器群を一部伴いながらも、主要な石器に関しては近畿以西の遠賀川系土器文化に共通する石器組成を当初から保有していたと考えられる。そしてその最初期には一部搬入品を含む可能性はあるものの、時をへずして在地の石材流通に依存し、自家供給的に石器生産を行ったものとする。とはいえ、今回明らかになった山中遺跡を除いてはなお不明瞭な当地方であり、今後の資料集積が望まれるところである。

②下呂石をめぐる

山中遺跡では下呂石を素材とした石器製作関連遺構が発見されている。製作された石器は石鏃・石錐が主であり、それに石匙が加わるかというところだが、その製品群が他の遺跡に供給される可能性を考える必要はないだろう。縄文時代から下呂石は主要石材として通用しているので、何も弥生時代だからと問題にすることもないが、注目したいのは弥生時代前期山中遺跡で確認され、また弥生時代中期の朝日遺跡・阿弥陀寺遺跡でも認められたように、原石の中に全く手つかずのものがあるということである。

原石のうち、遺跡において無傷で廃棄されているものはだいたい長径4 cm以下で、形状も球形のものが多い。中には割られているものもあるが、自然面を剥ぎ取る剥離が1回加えられるだけか、本文図版42-94のように、剥片を製作するということまで至っていない。つまり、残存長5 cm以上の石核から生産できる剥片は2分の1長としても2.5 cm程度となり、石鏃ほかの製作には適合するが、4 cm以下の原石では目的とされる剥片が十分はぎ取れないということであろう。

ではなぜそんな原石が素材として持ち込まれているのか。

Ai. 製作者は石材採取を行っていない。

ii. 採取者は石材の特徴は知っているが、その大きさまで注意が及んでいない。

iii. 石材入手は製作者の直接管掌事項にはない。

Bi. 下呂石は遺跡周辺での採取は不可能である。

ii. いずれも河原の転石であるから、木曽川まで採取にいかなければならない。

iii. しかし、木曽川で採取可能な地点は、ダム建設など治水事業の行われた現在、復元することは困難である。

ci. 下呂石を石材とするのは縄文文化の知識である。

ii. いつ弥生文化の知識に移入されたかはまだ不明確である。

iii. 山中遺跡の時期には弥生文化の知識となっている。

di. 縄文時代以来の石材流通を破壊することなくそれに弥生社会が依存するのであれば、産地が圏外にある場合それに直接介入することは難しいだろう。あくまで受容者としての位置に立つことになる。

ii. 物資交換が1点1点ではなく、原石1カゴを単位とするような形で行われたとすれば、そこに望まない規格の原石が含まれている可能性は高いだろう。

iii. そうした交換は、遠賀川系（土器製作・使用）集団が内陸に進出して搬送ネットワークを形成したというよりは、下呂石産出地が在来の突帯紋（土器製作・使用集団）系統（特に山間部を活動領域としその知識に富む集団であったことは当然考えられる）の分布圏内となるので、遠賀川系（土器製作・使用集団）主体の遺跡での条痕紋系土器の高頻度出土に示されるように、恒常的な交流のなかで搬入が行われたと考える。おそらく、石材以外の「山の幸」も同様にもたらされたと考える。

ei. 弥生時代中期は基本的にこのネットワークを継承する。

4 集落と墓制

〔環濠集落〕

伊勢湾地方における弥生時代前期の環濠集落は、伊勢地方永井遺跡（四日市市教育委員会 1973）・大谷遺跡（四日市市教育委員会 1966）、尾張地方高蔵遺跡・松河戸遺跡、三河地方白石遺跡がこれまで知られており、今回それに山中遺跡を加えることになった。

弥生時代前期の集落が基本的に環濠集落という形態をとることは、この伊勢湾地方においてもますます確実の度を強めたわけである。この点で朝日遺跡・西志賀遺跡がはたしてどうであったか知りたいところである。

朝日遺跡については貝殻山貝塚周辺は別にして、その北北西に位置する地点でⅡ期の方形周溝墓群下から弥生時代前期包含層が検出され、土器および石器の存在から居住域である可能性のあることが報告された。しかし、そこでは住居跡の検出はなくまた環濠とおぼしき溝の検出もなく、環濠集落として認定できる内容はない。このことがこの地区の特殊性、たとえばここが中心居住区ではなく周辺の地区であることを示している可能性もある。だが、果してそうだろうかという思いもある。朝日遺跡や西志賀遺跡では大規模な貝層が形成されており、単にそれが生業の一端を示すものではないことは、他にそのような貝塚を形成する遺跡の無いことから予想される。すなわち交易品生産としての海産物加工である。加工・交易という経済センター的な役割を想定することができるなら、そのような集落は果して環濠集落として営まれるかどうか考える必要があろう。環濠集落であることが普通の集落であることの証なら、しかもこの時期の環濠が以後のそれに比べて規模が劣り貧弱であることを観るなら、朝日遺跡・西志賀遺跡は地域の核としての特殊性から環濠集落ではない可能性を考えてみたい。

ところで山中遺跡の環濠集落は、調査によって検出された部分は南部のほんの一隅であり全体像を明らかにしたわけではない。しかし、その一隅から切り合い重複する竪穴住居群が検出されるとともにその中に石器製作遺構（SB17）が含まれていたのである。SB17からは下呂石の原石・石核・剥片が出土し、ここで石鏃などの石器が製作されたことが判明した。すでに第三次調査（一宮市教育委員会 1982）で検出された中央に土坑を有する同様の石器製作遺構の存在とともに、集落内部における機能区分の可能性を考える上での材料を提供することとなった。ただ、この点は石鏃

という限られた種類の生産だけでなく、未成品の出土しているえぐり入り柱状片刃石斧の製作を含めて、石器全体の生産体制についての集落内配置の検討が今後の課題である。（石黒立人）

〔墓制〕

弥生時代前期の墓制については、現在までのところ土墳墓、土器棺墓、方形周溝墓が確認されている。突帯紋土器期には、火葬骨の存在が指摘されているが、弥生前期にはみられない。弥生前期の墓制は複雑な様相を呈する可能性がある。ここでは、方形周溝墓にしばって考えてみたい。

①方形周溝墓の発生

方形周溝墓は、「溝により区画する墓」である。この区画するという発想は、稲作農耕社会の底辺を流れる基本的な原理であり、その根本には当然水田耕作を中心とした土地分割がある（石黒 1987）。水田耕作開始以降、この区画墓は、台状墓、四隅突出型墳丘墓、貼石墓など形こそ違え全国的に登場する。方形周溝墓は、その区画墓を代表する最もポピュラーな墓制といえる。

現在までに弥生時代前期（Ⅰ期）に属する方形周溝墓は、北部九州、近畿地方で確認されており、そして今回の山中遺跡の発掘調査によって伊勢湾沿岸地方がそれに加わることになった。

北部九州地方…北部九州地方では1例確認されている。

東小田峰遺跡（柳田 1986）福岡県朝倉郡夜須町 全体の形状は不明であるが、18m×13mの長方形の墳丘をもち、幅3m・深さ2mの周溝に囲まれるという。前期前半に属するとされる。

近畿地方…近畿地方では、現在のところ確実なものは池上遺跡例が唯一か。東奈良遺跡、安満遺跡例はセクション等からの確認であり、平面形態は不明である。近年調査された多遺跡検出例はⅠ期段階の方形周溝墓の可能性はある。

池上遺跡（第二阪和国道内遺跡調査会 1971）大阪府和泉市 8.4m×6.7mの規模を有し、やや墳丘部が長方形となる。周溝は南・西側の一部が削平？されており、不明確であるが、周溝が全周するA0形、または1ヶ所にブリッジを持つA1形の可能性が考えられる。前期新段階の土器が出土している。

多遺跡（檀原考古学研究所 1988）奈良県磯城郡田原本町 一辺7m程度の墳丘を持つものである。西・南側の周溝は検出されておらず、その点で若干の問題が残る。方形周溝墓とすれば、2ヶ所にブリッジをもつA2b形となる。第Ⅰ様式に比定される甕等が若干出土している。

伊勢湾沿岸地方…Ⅰ期に比定されるものは山中遺跡検出例がある。可能性として朝日遺跡例、松の木遺跡例がある。

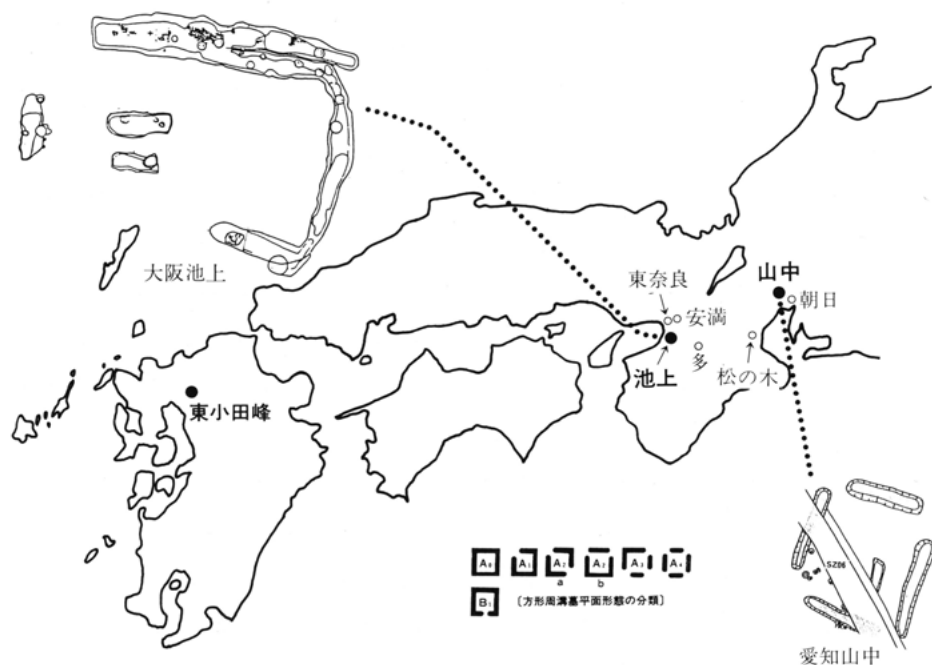
山中遺跡（本文参照）愛知県一宮市 当該期の方形周溝墓を9基検出。詳細は本文に譲るが、いずれも四隅にブリッジを持つA4形である。規模は一辺6～10m前後である。Ⅰ－4期。

朝日遺跡（愛知県教育委員会 1982）愛知県西春日井郡清洲町他 墓域Aにおいて検出さ

れ、かつてA4形として報告されたされたものである。4.8 m×4.8 mの規模を持つ。墳丘部分よりⅠ期の土器（壺棺？）が出土したこと、南東溝が弥生前期の溝に切られている可能性が高いことをその根拠として時期決定をされた。しかし、南西・南東溝は検出されていないこと、壺棺とされた土器と前期包含層との関係が不明瞭なこと、さらに朝日遺跡の方形周溝墓は非A4形で出現する可能性が指摘されていること（石黒 1987）等の理由から、時期・形態ともに微妙な位置にある方形周溝墓といえよう。

松の木遺跡（三重県教育委員会 1990）三重県津市 中期前半以前に遡る可能性のある方形周溝墓が1基検出されている。北 西側の周溝は未検出であるが、A4形の可能性が考えられる。遺物としては細片ではあるが遠賀川系土器が周溝内より出土している。

以上、弥生時代前期に属する方形周溝墓をとりあげてきた。その発生については、現状では北部九州地方で検出された東小田峰遺跡例が最古となる。しかし、基本的に方形周溝墓という墓制は九州地方には定着しない点、北部九州地方と近畿地方を繋ぐ位置にある中国・四国地方では前期段階まで遡る方形周溝墓は確認されていない点等よりみれば、単純に北部九州地方から一元的に伝播したとは考えにくい。また、近畿地方で確認されている方形周溝墓の平面形態と伊勢湾沿岸地方で確認されるタイプとは異なっており、これもまた簡単には結び付けることはできないであろう。方形周溝墓という区画墓が水田農耕社会に内在する土地分割の原理に基づいて構築されたものとするならば、いづれの地域にも方形周溝墓の発生する基盤はあり、北九州－近畿－伊勢湾沿岸地方を確実に結び付ける要素がない現段階においては、各地域において自生的に発生したものと考えておきたい。



第54図 弥生前期の方形周溝墓分布図

② A 4 形方形周溝墓の広がり

A 4 形方形周溝墓は、四隅にブリッジを持ついわゆる“東日本形方形周溝墓”と称されるタイプである。

A 4 形方形周溝墓の分布に関しては、前田清彦氏の研究（前田 1991）に詳しい。それによると A 4 形（前田氏分類の g 類）が主体的に分布する地域は、東海地方（Ⅰ期からⅣ期）、北陸地方（Ⅲ期から古墳）、関東地方（Ⅲ期からⅤ期）であり、客体的に九州（古墳）・中国（Ⅳ期から古墳）・近畿地方（古墳を中心）で散見できるという。

東海地方は、大きく伊勢湾沿岸地方と三河・遠江とに分けることができ、伊勢湾沿岸地方では、山中遺跡例にみられるように確実にⅠ期段階に A 4 形方形周溝墓を築造し、以後、弥生時代中期を通して、その主体的形態となる。一方、三河・遠江においては、伊勢湾沿岸地方に若干遅れて登場するようで、現状では静岡県山下遺跡（袋井市・掛川市 1984）のⅡ期末からⅢ期に位置づけられるものが最古例となる。北陸地方、関東地方において方形周溝墓が登場するのは、Ⅲ期以降のことであり、その出現期から A 4 形方形周溝墓をみることができる。

以上よりみれば、伊勢湾沿岸地方→三河・遠江地方→関東地方、伊勢湾沿岸地方→（美濃・飛騨地方）→北陸地方と伝播したものと推定できる。それは、A 4 形方形周溝墓が分布する地域には東海系土器の進出が認められる（前田 1991）という点からも裏付けることができよう。とすれば、このタイプの方形周溝墓の起源が伊勢湾沿岸地方にあることは確実であろう。

③ A 4 形方形周溝墓の展開の背景

弥生時代前期に伊勢湾沿岸地方で誕生した A 4 形方形周溝墓は、②で記したように、主に東日本を中心に広がりが認められ活発に築造される。その展開の背景について考えてみたい。伊勢湾沿岸地方最大の拠点集落である朝日遺跡の動向がその鍵を握ると考えられる。

弥生時代前期の尾張地方の状況は、大きく 2 つの地域に分類できる。それは、一宮市周辺に展開する遺跡群と尾張南西部および名古屋台地上に広がる遺跡群であり、それぞれが安定した展開をみせてきた。しかし、前期末～中期初になるとその状況が揺るぎはじめ、集落の動向に大きな変化を生じてくる。それは、A 4 形方形周溝墓など独自の文化をもった一宮市周辺地域の遺跡群の衰退であり、山中遺跡をはじめとしてそのほとんどの遺跡が姿を消してしまう。以後、継続して集落が営まれるのは、僅かに河田遺跡（一宮市 1968）がみられるのみである。そして、その一宮市周辺の遺跡群の衰退に対応する形で急激に朝日遺跡の成長が認められるのである。一宮市周辺の遺跡群の衰退が大規模な社会変動を誘引することになったと十分予想できるであろう⁽²⁾。

朝日遺跡における方形周溝墓の築造は、前期末から中期初にかけて非 A 4 形主導で方形周溝墓が築造され、中期前葉の段階で台状部が 34m にもおよぶ超巨大方形周溝墓も含め一気に A 4 形に転換し、中期を通してほぼ A 4 形に統一された墓域群を構成する（愛知県埋蔵文化財センター 1991）。

この朝日遺跡における造墓活動を、一宮市周辺の遺跡群の衰退に伴う社会変動を考慮に入れ、見

つめ直してみると、次のように想定できよう。前期末から中期初頭の段階で、朝日遺跡では非A4形主導で方形周溝墓が築造されていた。しかし、ほぼ時を同じくして社会変動が引き起こり、集落規模の拡大が余儀なくされるとともに、非A4形主導の方形周溝墓を築造する体制に変化が生じてくる。やがて、集落の拡大は集団内部における階層格差に一層拍車をかけることになり、その頂点として台状部長軸長が34mにもおよぶA4形タイプの超巨大方形周溝墓を出現させることになった。

この超巨大方形周溝墓がA4形タイプで築造されたことは重要な意味を持つ。超巨大であるが故に社会全体に与えるインパクトは強く、上位階層から下位階層へのカタチの浸透が図られ、それが、まず朝日遺跡におけるA4形方形周溝墓の統一的様相を形成する要因となった。そして、伊勢湾沿岸地方最大の拠点集落である朝日遺跡で築かれ、その主流形態に成り得たからこそ、東日本を中心とした弥生墓制に多大な影響を与え広く浸透させていったものと考えられよう。（服部信博）

5 弥生時代の「道」をめぐって

集落内部においては各機能空間の接続、集落外においては他の集落あるいは活動拠点との接続のために人の往来が行われる。しかし、その経路がすぐさま恒常的な往来のために設けられる「道」といえるかどうかは確定していない。遺構として検出されれば別だが。

集落内部の場合には、住居の出入口をつないで「道」を想定するとしても、不定形な空間内に最短から最長まで経路は無数にあり、街区が形成されなければ「道」を想定することは困難である。

方形周溝墓からなる墓域では、「墓道」を想定することにより単位グループの抽出が行われてはいるが、古墳時代の横穴式石室墳という、出入口が確定でき、しかもある程度継続した葬送が行われる場合に想定される「墓道」概念をそのまま適用するのは問題があろう。

敦賀市吉河遺跡では確かに「墓道」が想定された。だがこの場合には、集落と墓域の展開に地形と整合した方向性があり、しかも想定される集落の出入口の一方にある墓域に帯状の空間が存在したことから「墓道」が想定できるのである。したがって、これを幹線としてこれから各方形周溝墓への経路を復元しても、それを支線としての「墓道」と見なし得るとは限らない。つまり、一回性の経路を「墓道」としてよいかということである。それではあまりに詩的だ。

集落間の場合には、集落間の最短経路を道として想定しやすいが、河川の乱流する平野部デルタ地帯ではそれは困難である。山間部では、谷底平野が形成され河川敷が連続している場合は別にして、河川兩岸が崖面を形成し河川敷が不連続であれば、そこに安定した経路を求めることは難しい。もちろん、経路は固定したものではなく短期的にでも通行可能であればよいのであるが、実際集落間の経路を想定することは難しいのである。だから、集落間の交通を考える場合、地図上の集落分布から経路を復元することよりは、単に空間的位置関係として抽象的に議論するほうが困難は少ない。

酒井龍一の提唱する「面態」「線態」はそのように考えるべきであり、集落間をつなぐラインに意味はない。実際の「道」とは無関係な抽象概念である。そうであればこそ、実際の集落関係を検討することが必要となるのであり、われわれはモデルに人間の顔を与えなければならない。

（石黒立人）

註

- (1) 一宮市内に所在する遺跡で検証すれば、絶対量は不足し判然とはしない部分が多いが、弥勒遺跡（1-3期）出土の「亜流」甕は口縁の肥厚が顕著ではない。それに対し、河田遺跡（1-4期）遺跡出土例は、口縁部の肥厚が顕著となる。（図版46参照）
- (2) 一宮市周辺の遺跡群の衰退が何に起因するのであるか、ここでは明らかにしえないが、広域的な影響を及ぼす災害と容易に想像がつこう。そういった点よりみれば、今回の山中遺跡の発掘調査でみられた前期末段階の洪水性堆積層の存在は示唆的である。

《参考文献》

- 石川日出志 1988 「伊勢湾沿岸地方における縄文時代晩期・弥生時代の石器組成」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編2・研究編 愛知考古学談話会
- 石黒立人 1987 「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現期の様相」『マージナル』No.7 愛知考古学談話会
- 1990 「弥生時代の遺構と遺物」『阿弥陀寺遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集
- 泉 拓良 1989 「中国・四国地方以東の突帯紋系土器様式」『縄文土器大観』第4巻
- 伊藤久嗣 1980 「遺物・遺構の考察」『納所遺跡一遺構と遺物一』三重県教育委員会
- 大江 令 1965 『飛騨の考古学Ⅰー益田川流域の縄文遺跡』
- 大参義一 1972 「縄文式土器から弥生式土器へ」『名古屋大学文学部研究論集』56
- 奥 義次 1990 「三重県における凸帯文系土器出土遺跡の分布相」『Mie History』vol.1 三重歴史文化研究会
- 神谷友和・後藤浩一 1990 「春日井市松河戸遺跡SD120について」『愛知県埋蔵文化財センター年報ー平成元年度』
- 紅村 弘 1956 「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代学研究』13
- 1967 「水神平式土器とその周辺」『信濃』19-4
- 1981 「東海地方弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸問題ー本文編ー補足改訂版』
- 小玉道明・伊藤 洋 1973 「補論弥生時代前期の土器について」『永井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会
- 佐藤由紀男 1982 「引佐郡三ヶ日町大字津津崎字青木採集の水神平式土器について」『静岡県考古学研究』12
- 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34-4
- 鈴木克彦 1990 「「亜流遠賀川式土器」再考」『Mie History』vol.2 三重歴史文化研究会
- 高橋信明 1985 「尾張東北部・南西部」『マージナル』No.5 愛知考古学談話会
- 谷本鋭次・山沢義貴 1971 「まとめ」『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会
- 中村五郎 1982 「畿内第Ⅰ様式に併行する東日本の土器」
- 中村友博 1987 「水神平式土器」『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ
- 賛 元洋 1991 「愛知県（三河）白石遺跡」『東日本における稲作の受容』ー第Ⅲ分冊甲信越・北陸・東海地方ー東日本埋蔵文化財研究会
- 久永春男 1966 「東海」『日本の考古学』Ⅲ 弥生時代
- 柳田康雄 1986 「集団墓地から王墓へ」『発掘が語る日本史』6-九州・沖縄編 新人物往来社
- 前田清彦 1991 「愛知県（三河）麻生田大橋遺跡」『東日本における稲作の受容』ー第Ⅲ分冊甲信越・北陸・東海地方ー東日本埋蔵文化財研究会
- 前田清彦 1991 「方形周溝墓平面形態考」『古代文化』Vol.43 古代学協会
- 増子康眞 1985 「愛知県を中心とする縄文晩期後半期土器型式と関連する土器群の研究」
- 愛知県教育委員会 1972 『貝殻山貝塚調査報告』
- 1982 『朝日遺跡』
- （財）愛知県埋蔵文化財センター 1990 『月縄手遺跡・貴生町遺跡』
- 1991 『麻生田大橋遺跡』
- 1991 『朝日遺跡Ⅰ』
- 愛知考古学談話会 1985 『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編1
- 明科町教育委員会 1991 『ほうろく屋敷遺跡』
- 一宮市 1968 『新編一宮市史』資料編2-弥生時代
- 1970 『新編一宮市史』資料編1-縄文時代
- 一宮市教育委員会 1982 『尾張病院山中遺跡発掘調査報告書』
- 檀原考古学研究所 1986 『多遺跡第11次発掘調査報告書』
- 可児市教育委員会 1973 『北裏遺跡』
- 岐阜県教育委員会 1989 『徳山ダム水没地区埋蔵文化財調査報告書 はいづめ遺跡』
- 塩尻市教育委員会 1989 『五輪堂遺跡』
- 第二阪和国道内遺跡調査会 1971 『第二阪和国道内遺跡発掘調査報告』4
- 名古屋市教育委員会 1971 『古沢町遺跡発掘調査報告Ⅰ』ー縄文時代編ー
- 1982 『高蔵遺跡発掘概要報告書』
- 南山大学人類学博物館『高蔵貝塚Ⅲ』人類学博物館紀要10
- 袋井市・掛川市教育委員会 1984 『山下遺跡発掘調査報告』
- 四日市市教育委員会 1966 『大谷遺跡発掘調査報告』
- 三重県教育委員会 1990 『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』
- 南知多町教育委員会 1989 『神明社貝塚』